

シーズー犬 シヨーン天国へ



puffpuff

お誕生日に天国に

数日前からはほんの少しの食事とお水しか取れなくなり、少し動いては横に倒れ、自分では起き上がれなくなっていた。心臓を圧迫しないようにそっと抱き上げると頭がまるで壊れたぬいぐるみのようにぶら下がってしまう。それでも暫くするとなんとか体制を保ちながら腹這いになって必死に生きようとしていた。そんなことの繰り返しが数日続いた。酸素ケージに寝かせてみたり、酸素マスクを直接ショーンの鼻先に置いてみたりして少しでも呼吸が楽になるように、毎日祈るような気持ちでショーンの生を繋いだ。金曜の夜も一晩中苦しそうな息づかいが聞こえていた。土曜日の朝、私が気がついた時は、寝床から体の向きをトイレの方に向いた状態で倒れていた。長年の習慣で朝は寝室のすぐ外に置いてある自分のトイレに行こうとしたに違いない。前日もその前の日もフラフラで歩けないショーンを抱いてトイレに連れて行くと支えられておしっこをした。その朝は私が気がつかないうちに起き上がって自分で歩こうとしたのだろう。倒れたまま動けないショーンの胸の鼓動が激しくショーンの小さな体を揺らしていた。

こんなに小さな体で一生懸命生きようとしているのに、何もしてやれない。

横になったまま苦しそうなショーンの体のがのけぞって、最期の力を振り絞るように、何度も何度もキャンキャンと悲痛な叫び声を上げた。それから、おしっこほんの少しのウンチをして力がつきたようだった。それまで体を揺らしていた心臓が止まった。手足や頭がまだけいれんしているように思えたので何度も心臓に手を当ててみたが、何も伝わってこなかった。ああ、ショーン、こんなに頑張ったのに、ごめんなさい抱きしめてあげることもできなくて、苦しかったねショーン、ショーンちゃん良くがんばったね、時計を見た。6月2日の朝6時55分だった。ショーンは15歳のお誕生日を迎えた朝天国へ旅立った。



喪失感

ションちゃんおはよう、と声をかけるとションは小さなお尻を左右に振っておはようと言ってくれた。毎朝決まって私の後をついて寝室を出る。出たところに置いてあるトイレで用を足し、今度は台所の近くで朝ご飯の催促をする。私の朝食からパンを少しと生野菜を貰うとお水を飲んで、安心したようにまた寝入ってしまう。私が家事に追われている間はスースーと寝息を立てて寝ていた。何の不安もなく良く眠れていた頃、そんなションを見る度に忙しくしていても、かわいいなと思ってホッとする瞬間だった。

ションの食事は全て手作り、かわいいションや2年前まで一緒に暮らしていたサンディーのために毎日の夕ご飯作りをかかしたことがない。外に出かけるときは作り置きして出かけた。野菜が大好きなションの為にジャガイモ、ニンジン、キャベツ、トマト、カボチャ、アスパラ、ブロッコリ、それこそ冷蔵庫の中にある野菜（タマネギ以外）ならなんでも鶏肉と一緒に煮込んでやった。元気な時は作っている間中、キッチンの端でお座りをしたまま待っていた。そのうちに瞼が重たくなって居眠りを始める、それでもおりこうに待っていた。食べ終わると決まってお水を飲んで、それからトイレに行く、この習慣は5月の初め、具合が悪くなり入院するまで続いた。

ションちゃん、ごめんね、もっと早く心臓が悪いと気づいていれば、．．．ションちゃん、最期はたくさんご飯食べさせてあげられなくてごめんね、．．．ションちゃん苦しかったのに言えなかったんだね、．．．お散歩行っても良く立ち止まったね、無理をさせてごめんね、．．．いつもお留守番ばかりさせてごめんね、．．．たとえ数日でもお家に連れて帰ってあげられなくてごめんね（このことは後でどんなに後悔したかわからないほどだ）．．．
今でも後悔と自責の念が頭の中でグルグル渦を巻いている。それはこれからもきっと終わることはない。

ションちゃん、おいでーと声をかけるとバタバタと急ぎ足でお尻を降りながら嬉しそうにやって来た。ご飯のとき、おやつのとき、家族が帰ってきたとき、お散歩のとき。その姿がかわいくて仕方がなかった。私の足下や隣に寄り添ってぐっすり寝ている姿が愛おしくて仕方がなかった。

ションの全てがなくなった、というより奪われた。どこにも持って行き場のない、言葉では表現しようのない喪失感が悲しみになり繰り返し繰り返し襲ってくる。我慢していると涙になり溢れ出てしまう。何かをしていないと涙の沼に落ちて這い上げられそうもない。失った愛の対象は私にとってあまりに大きかった。



肺水腫

何故？いつから？疑問が一気に湧いた。ションが肺水腫になっていた。インターネットで犬の肺水腫と検索すると心臓から溢れ出た血液が肺に溜まって呼吸困難になる病気と分かった。以前から抱っこをしたときなど心臓の音が手に響いていたのに、気になりながら病院に連れて行くのを躊躇していた。

ある日いつものようにお散歩した夜（数週間前から立ち止まることが多くなり良く抱っこをした）、急に息が荒くなり寝苦しく辛そうだった。翌日ペットクリニックに連れて行った。血液検査とレントゲン検査の結果、肺水腫ということだった。同じことが一週間前にもあった。その時も血液検査とレントゲン検査で、少し肺に血液の陰があるようだったので薬（心臓の薬と利尿剤）を処方してもらい家に連れて帰った。幸いすぐに以前の元気なションになり食欲もあったのですっかり安心してた。何故そのときションの心臓が命を脅かす程悪くなっていることに気づいてやれなかったのか、もっと安静に生活させていたら、あるいはもう少し命を繋ぐことができたんじゃないか。何度自分を責めてももうどうすることもできない。

そして2回目の診断は肺水腫、そのまま入院することになった（5月3日）。それが良かったのか悪かったのか、ションの命が絶たれた今となっては分からない。酸素ケージに入れられたションに夕ご飯を持って行って看護師の人に預けたが、ケージの傍で医師の話聞く私に向かってワン、ワン、お家に連れて帰って、と一生懸命訴えるションを置いてその場を離れたときの不憫さは一生忘れることができない。あのときどうしてもっと医師に主張しなかったんだろう？連れて帰って私が家で面倒みたいと。二日後に退院したときのションは、息も絶え絶えで自力で立ち上がることもできず衰れで弱々しい姿をしていた。良くなるようにと入院させたのに．．あの日は吠えることもできたのに．．ご飯も食べられたのに．．何故入院させて悪くなるの？家に連れて帰ったその日（5月5日）から私の必死の看病が始まった。



きっと良くなるよ

5月5日の土曜日の朝ペットクリニックからショーンの様態が悪いと電話があった。すぐにかけてつけた私はすっかり衰弱して苦しそうなショーンを見て、何が何でもショーンを家に連れて帰ろう、そう思い医師に伝え、家で面倒を見るなら酸素ケージを用意したほうが良いと言われ、その足で急遽酸素ケージをレンタルしてきた。5月5日は子供の日、連休中でもレンタルできる場所があって本当に良かった。中で動き回れるようペットクリニックにあったものよりも大きめのケージにした。お昼に部屋に設置したそのとき獣医からまた電話があった。ショーンの様態が良くないのでその日退院させたいのなら今すぐ来て欲しいと。3日前入院させたときよりもすっかり弱って今にも息絶えそうになってしまったショーンをそっと抱いて車に乗り大急ぎで家に連れて帰ってケージの中へ入れた。

その夜は一晩中ケージの中で苦しうにしながらも、家に帰ってホッとしたのか、よく眠っているショーンを見守った。翌朝6日、きっとトイレに行きたいのだろうと思って、ケージの扉を開けてやると、なんとか立ち上がると、ヨタヨタとトイレの方へ向かったので倒れないように手を添えてやると、いったい何日分溜めていたんだろうと思うくらいたくさんおしっこをした。その時の私の安堵感といったら、手足の力がいっぺんに抜けて行くのがわかったくらいだった。食事が取れるようになったのは翌日の7日の夜から、それまでは家にあったブドウ糖を薬と一緒に水に溶かして与えていただけだったので、夕ご飯にジャガイモとカボチャを柔らかく煮てペースト状にしたものを大さじ一杯ほどを食べてくれたときは、この子はきっと良くなる、いいえ、私が良くして見せる、と心に誓いながら、嬉しくて涙が止まらなかった。翌日からは少しずつ食欲も出てきて、量は少ないものの、おやつに一口を数粒、みじん切りにしたスイカやトマトなどをやるとおいしそうに食べていた。それからは、殆どケージに入る必要もないほど呼吸が安定してきた、と同時に夜は私のベッドに乗せてやると朝までぐっすり良く眠るようになった。食欲が戻って来ると、困ったことにご飯の催促をしてワン、ワンと吠えるようになった。歩くことも吠えることも当時のショーンの心臓には大きな負担になったに違いない。以前一日一回だった食事も心臓に負担をかけないようにと、朝と夜の2回に分けていたので、いつもお腹が空いていたのかもしれない。キッチンで夕食の準備をする私の足下で生野菜をねだるショーンは、まるで以前と変わらず元気に見えて、もしかしたらショーンはもう少し長く生きられるんじゃないか、そんな希望を持ち始めていた。

それから暫くはショーンの様態が安定して見えたので、私も以前のような生活を取り戻しつつも、ショーンの行動や息づかいを見守る日々だった。そのときの3週間は熟睡できない日々、ショーンを家に残す心配との葛藤の日々、帰宅は一刻も早くショーンの元へという焦りの日々、それでも一日ずつショーンの命が続くことが嬉しくて、ショーンと一緒にいられることが何より幸せで、そのために必死だった。亡くなる一週間前の土曜日、退院してちょうど3週間が経ったころまでは...



5月も終わりに近い週末の土曜日いつものように私の後をついてきては傍に寝たりしていた。夕ご飯も良く食べるようになっていたので、それまでよりほんの少し量を増やしてやってみた。日曜日の朝はなんだかあまり食べたそうにしない、どうしたのかな？夕べのご飯がやはり多かったのかな？急に食欲が落ちた。トイレの回数も減った。ときどき歩いていて急に倒れた。食べるご飯の量が減った。もしかして肺水腫の再発？何も激しい運動はしていないのに、いったいこのときショーンの心臓はどうなっていたのか。ペットクリニックに電話して何度も聞いてみた。やはり連れて来て検査しないと分からないと言われた。

29日（火曜日）の朝、トイレに行こうと立ち上がり歩き始めたがゴロンと横に倒れたときにおしっこウンチが出てしまったらしい。翌日30日（水曜日）お昼過ぎに私が出先から帰ってくると、床で倒れて失禁、朝に食べたひとかけらのトマトを吐いていた。私がいなくて苦しませてしまった。すぐにペットクリニックに電話をして急患として診てもらえるよう頼んだ。今度は絶対に入院はさせない覚悟で連れて行った。

クリニックではすぐにレントゲン、血液検査が行われた。前回の退院時に比べると肺水腫はさほど悪くなってはいないようだったが、明らかに心臓が大きく見えた。息が荒いので暫く酸素ケージに預かるようになってくれたので、私はその間大急ぎで2週前に返却したばかりの酸素ケージをもう一度レンタルしに車を飛ばした。そして帰りにショーンを引き取り家に戻ってきた。ショーンはそれからどんどん衰弱していった。ご飯を催促することはなくなり、大好きなおやつや野菜もほんの少し口にするともう食べられないと横を向いた。お水も自分から飲みに来られなくなり、トイレにも自分では歩いて行けなくなった。力なくただ床に伏せて苦しそうにしているショーンが不憫でかわいそうで仕方がなかった。6月1日（金曜日）ショーンが食べたものはおやつのポ一口を5粒ほどと夕ご飯の野菜を煮てつぶしたものを大さじ2杯くらい、大好きだったスイカは食べてくれなかった。その日がショーン最後の食事になろうとは、...

同じ日の夜もう動けなくなったショーンをそっと抱いて寝室のショーンの寝床に連れていった。酸素マスクを顔に近づけて見守った。夜中2時過ぎ、苦しそうに体を動かそうとした、横になったまま敷いてあったトイレのシートにおしっこが出た。それから4時前、クゥーというような声が聞こえたので、お水をやると一生懸命お水を飲んでくれた。喉が渴いていたんだね。夜が明けずっと見守った。その夜がショーンとの最後の夜になろうとは、...



ありがとう

動物は自分の最期が分かるという。入院の後奇跡的に元気になった3週間は、もしかしたらションが私たち家族にくれたプレゼントではないか。亡くなる前日のお昼過ぎ、出先から大急ぎで戻った私を部屋のドアの近くで迎えてくれたション、私を見るとグラグラしながら立ち上がり力を振り絞るように尻尾を1回左右に振って喜んでくれた。以前は、僕ねちゃんとお留守番できたよ、ご褒美ちょうだい、と言うように私の後をキッチンまでついてきたション、このときもそうしようと思ったに違いない。立って歩こうとしてその場で倒れてしまった。

ションちゃん、小さなお尻を振り振り
いつも家族を出迎えてくれてありがとう。

お留守番ばかり淋しい思いをさせてごめんね。
心臓が痛いのが治してあげられなくてごめんね。

ションちゃんがいたから頑張ったよ。
ションちゃんがいたから楽しかったよ。

幸せをいっぱい、いっぱい、ありがとう。
これからもずっと宝物、私の大切な宝物。

